

「語られた異界」に見る ファンタジー性

—伝承から、創作から—

中 村 とも子

はじめに

伝承、創作を問わず、物語を構成する大きな要素のひとつに異界がある。主人公が異界へ行く話を日本の昔話を例にとってみると、「浦島太郎」「桃太郎」「夢見小僧」「甲賀三郎」「地藏淨土」「天人女房」など、たちどころに挙げることができる。一方、異界から来るのは鶴や蛇などの異類女房たち、異界から与えられるものは金ひり馬に代表される、人間に幸運や富をもたらす呪物がある。昔話では、不思議なことが当たり前のように起こり、そこにファンタジーが生まれる。そして、昔話のファンタジー性がもつとも抽出されるのは異界をめぐる出来事である。シンポジウム当日、徳田和夫が指摘したように、「物語とはすなわち異界を描く事」であるならば、昔話の物語性は異界と異界に属するものがなければ成立しないと言つても過言ではない。異界を描く、語る物語は、昔話はもとより、口承文芸のさまざまな分野、創作文

学、そして絵本などにみられる。これらの分野で、異界はどのように語られ（表現され）ているか、互いに重なり合うものはあるのかを追求することによって、昔話における異界のイメージを明らかにし、ひいては、異界が語られる事によって生まれるファンタジー性を明らかにしたいということが、今回のシンポジウムのねらいであった。当日の議論は大きなテーマへと発展したせいもあり、簡単ではないが、コーディネイターとしての責任上、まとめを試みる。なお、パネリストとして「中国の伝承に見る異界」を発表した新島翠と「イギリスのファンタジーに描かれた非日常」を発表した川越ゆりの二名が都合により本誌への寄稿を見合わせたので、不十分ながら両名の発表にも触れる。両名の報告、発言内容に言及する際はあらかじめ与えられた両名の発表草稿と当日のメモを基にした。

一 異界と人間界のあいまいな境界

新島が発表した中国のヌー族とトールン族の伝承に、異界と人間界の区別があいまいなものがあることは興味深い点である。ヌー族の伝承「アナ」を例にとると、鬼と人は姿が大変よく似ていて、ともに同じ村に住んでいたという。人間の女の子、アナは鬼の女の子と仲良しで、鬼の家に泊まりに行く。鬼の母親がアナをたべなくなり、娘二人の頭に目印をつける。夜中に目をさましたアナは鬼が包丁を研いでいるのを見て、目印を取り替えると、鬼は自分の子を煮て食べてしまう。アナは自分の家に帰り、親にそ

のことを話したので、以後、人と鬼は別々に暮らすようになつたといふ。

このような伝承から、人間と異類の区別のない、あるいは、あいまいな世界があることがわかる。鬼は異界に住んでいるものではなく、隣人として共に暮らしている。いわば、異類と人間の住み分けがない。新島によれば、この民族は高地に住み、焼き畑農業を営み、石器を使用し、文字を持たないそうである。彼らの世界観では、天と地は大変近く、九段のはしごを登つて天へ行くことができる。日常的に天へ出かけていつて鍛冶仕事をしたりする。

異界と日常との距離が非常に近い。あるいは日常と隣接している。異界と人間界の区別があいまいであることは、中国の一部の民族に特有の世界観であるとは断言できない。たとえば日本の話の中にも、日常的な暮らしの中に、異界の存在が見え隠れしている場合がある。例として次のような話がある。「雪の降る夜、長者の家に若衆が集まつて話をしているうちに、その家のおたねという女子衆がうまいものを取つてきてやるといって外出し、柿をたくさん持つて戻つてくる。柿を何度も持つてくるので、雪の降る時期にどこにたくさんの柿があるのだろうと不思議に思つた若衆がおたねのあとをつける。おたねは谷間の大きな池に着くと着物を脱ぎ、蛇体になつて池の真ん中にある島の柿の木に登る。驚いた若衆が長者の家に戻つてこの話をすると、おたねは二度と戻つてこなかつた」（注一）。

ここでは、女がなぜ蛇になるのか理由は明らかにされない。女

は蛇の生まれ変わりなのか、そもそも蛇なのか、あるいは、人間が突然蛇に変わるものか、全く語られない。ただ、女が蛇になるという不思議さが語られるのみである。日常的な暮らしの中で、普通の女にみえる存在の中に、異類になる可能性が秘められている。これも、人間と異類の区別があいまいな点だといえる。異界を意識しなかつた人間（民族）は一般的な表現をすれば、近年まで近代化から遠い社会を営んでいたといえる。しかし、近代化された社会の民族の中にも、同じように、異界の存在と人間が未分化であるという意識の片鱗は伺えるのではないか。

一方、今回取り上げたイギリスの創作文学では異界と人間界の区別はどのように語られているのだろうか。川越ゆりはP.L.トーヴアースの『風に乗つてきたメアリー・ポピンズ』を例に挙げ、昔話の異界にあたる概念を非日常と表現した。メアリー・ポピンズは普通の人間のようにみえ、ナースの姿で現れるが、非日常世界からの訪問者である。彼女は伝承世界の人物と知り合いだったり、動物の言葉を操つたりして、たちまち子供たちをとりこにする。メアリーとの出会いで子供たちの日常は非日常世界に変容する。このように、非日常世界に属する人物が日常にやつてきて魔法を展開するところの本質は、日常世界の非日常化にあると、川越は指摘する。日常と非日常が融合しており、両者は表裏一体の関係にあるという認識が芽生えているといふ。このような感覚は先に上げた中国の伝承に見られるものとも近いし、日本の昔話也非常に近いものがあるといえる。日本の昔話に語られる異界も、

そこに到達するのにたいした時間はかかる。「ねずみ淨土」のように、日常の中にスポット的に異界への入り口が開かれる場合もある。「天福地福」のように、日常の仕事で通つてゐる畑である日突然富が授けられる。このようにみると、伝承された物語の中にも、創作された物語の中にも非常に良く似た感覚、日常が変容する一瞬や異界と融合してゐる空間への認識があるといえよう。

この点はまた、絵本論の立場から報告した沼賀美奈子の指摘にも通じるように思う。沼賀は、異界を視覚的に表現してしまう絵は、実は人間が普段見ているものとは違う姿を捉えているという。そのような絵画的表現は、異界が日常とごく近くにあり、同時にひどく遠いところにあるという感覚を同時に感じさせるという。

語られた物語や描かれた絵画に、異界や異類と人間とのあいだにあいまいなところがあるという意識が共通してみられるように思う。人間の中に漠然としてある感覚、隣人や同居人の普通の姿の中に秘められている異質性、また、自分の日常領域だと認識しているはずの空間に、ふと見出す異界との接点、それらを意識する感覚が、異界と日常が融合する一瞬を捉えるものなのではないか。

異界を流れる時間と人間界を流れる時間が一致していないことも、両者の明確な区別をつける点である。中国のペー族の伝承では、異界での一日が人間界の一年であつたり、山東省の伝承では一日が百年であつたりする。異界での超自然的な時間の経過は、わが国で語られる竜宮や山中の異郷でも同じであるし、東洋のみならず西洋でもアイルランドにそれを語る話がある（注二）。

創作文学では、過去という異界へ移動するタイムファンタジーがある。川越はアリソン・アトリーの『時の旅人』、フィリップ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』を取り上げた。主人公たちは過

二 異界と人間界の明確な境界

異界と人間界が明確に区別されている場合は、分野を超えてかなり共通する点がみられる。日常から離れている場所であり、人

去へタイムトリップするが、過去の世界にはとどまらず、最後は自分の時代に帰る。トムは過去にいたときにスケート靴を隠してもらい、現在に戻つてそれを受け取る。このような場面は、過去と現在が重複してある、つながつてあるという認識を伺わせており、タイムファンタジーは出会いはずのない現在と過去が一瞬重なることで、時間に対する新たな認識を与えてくれる、と川越は指摘した。

タイムトリップする主人公たちが現在に戻ってきたとき、過去へ出かけた時間から時はまったく過ぎていないか、数分しか過ぎていない。時計で計ることのできる時間のほかに、時計では計れない、動かない時間というものがある—記憶というのまさに動かない時間である、と川越は言う。タイムファンタジーのこのような点は、伝承の話とは大きく異なるところである。浦島太郎は異界から戻つてきたときに、何百年も過ぎた未来に来てしまったことを知る。時間は昔話の主人公たちを置き去りにしてしまい、動いていく。川越の言うところの、記憶という動かない時間を、彼らは持つていない。

三 隣接したところにありながら、踏破できない異界

川越はエリナー・ファーリジョンも取り上げた。彼女の作品群を分析すると、ファーリジョンは昔話風ファンタジーが得意であり、その作品群には話題ともいいくべきものがある、と指摘した。ファーリジョンの描く非日常世界は、海の底や壁を隔てた向こう側など、基本的に日常と隣接しているという。彼女の作品群によく登場す

る超自然性を持つ女主人公たちは日常に存在しながら、最後は日常をすり抜けて、現象の背後に去る。逆に、日常の人間が非日常世界に出かけ、その世界のしるしを持ち帰るが、それらが日常にとどまるることは決してない。日常と非日常の接触は一瞬で、永久にどちらかの世界にとどまることはできない、と川越はいう。

日本の昔話では、「うぐいすの里」へ行つた男に代表されるように、異界へ行つた人間はそこで生涯を終えることはなく必ずどつてこなくてはならない。逆に、異界から来訪したもの、鶴女房や天人女房は必ず異界へ去つていく。異界からもたらされる呪物や呪宝は人間に幸運や富を与える役目を果たすと此岸から消えていく。このような点には、ファーリジョンの描く、明確な異界と日常との境界性と非常に近い感覚がある。異界の存在は異界に、此岸の存在は此岸に、それぞれ本来の属する世界にあることが重要だという認識がある。

一方で、異界へ行つた人間が戻つてこないという伝承もあることは事実である。加藤耕義が報告したように、ドイツの伝説の中にもそれはあるし、日本の伝承の中では、蛇女房譚の中の「蛇娘型」「蛇淵型」といわれるタイプがそれにある。シンポジウム当日、徳田和夫は、物語の質によって異界を描き区切るいろいろな手法があると指摘した。たとえば、民間伝承に宗教が反映されると淨土、地獄、神仙郷などが異界となり、主人公の末路もその異界の特質に影響されるという。日本の話の場合、宗教というほど明確なものでないにしても、昔話よりは、事實性を強調する伝

説に近い範疇のものに、人間が異界から戻らない、あるいは、異界に取り込まれる傾向が見られるのではないか。事実性を重要視する話の本質は、出来事の背後に、聞くものに恐怖を感じさせるような不思議さを求めるところにあるのではないだろうか。そして、異界へ行つたままの人間は異界に属する存在となり、二度と此岸には戻れない。そうすると、此岸と異界のあいだに断絶はやはりあることになり、この点は、異界へ出かけたら必ず戻つてくる人間を語る昔話と同じである。

四 創作ファンタジーと昔話はどうかかわるか

伝承された物語に語られた異界、そして、創作文学に見られる異界、さらに、絵として描かれた異界の報告を聞いた後で、当日、会場の議論は、その土地の口承芸術の伝承の豊かさと、創作されたファンタジーとのあいだにかかわりがあるのか、というところへ発展した。発言された内容を要約すると、以下のようなことがある。今回取り上げたイギリスの作家たちが、子供時代に非常に昔話と触れていたことと、彼らが自分の作品に描いたファンタジーとは無関係ではない。昔話と同じモティーフが作品の中にみられたり、昔話がもつような普遍的なルールがあるからである。また、『ビーター・ラビット』に特徴的なように、実際の風景や自然を取り入れて描かれた作品があることは、その土地の豊かな自然や風土も作品に影響を与えている事が指摘できる。彼らの場合、豊かな自然と、昔話の豊かな伝承を養分として作品を生み出

したといえる。しかし、昔話の豊かな伝承と豊かな自然が残されている土地ならば、ファンタジー性を中心とする創作に向かうかといえば、一概にそうとはいえない。『大草原の小さな家』『赤毛のアン』などに代表されるような、ファンタジーというよりはリアリズムに結実した作品群も生み出されている。また、広大で豊かな自然と口頭伝承が残されている中国の「童話」はファンタジー的な側面よりも、教訓的で、現実的な側面を重視している。イタリアや日本の場合も、昔話の伝承は豊かだといえるが、今回取り上げたイギリスのものと比較すると、創作児童文学の質が違っている。このようにみると、創作文学とファンタジー性の表出の関係は、豊かな伝承や自然の残存とは直接かかわらず、むしろ、その社会における子供観（大人が子供をどう認識しているか）と、大きくかかわりがある。昔話は、ある地域のみで生まれ、そこだけで伝承されていくものではない。他の地域へ伝播していく部分がかなり大きいことは、さまざまな研究の成果が示している。昔話が伝播していく過程で、ある地域や社会が受け入れ、豊かにふくらませるモティーフを、他のところはそれを受け入れないといふことがおきる。同様に、児童文学のファンタジー性も、それがの地域や社会で受け入れる、あるいは生み出すものに大きく違ひがある。以上のような議論が出たところで当日は閉会した。

シンポジウムの企画者としては、異界という観点から展開されたファンタジー論が、それを生み出す風土や社会環境のあり方と関わるという方向に発展した事は予期せぬものであったが、昔話

と創作のファンタジー性が重なりあう部分、あるいは大きく異なる点はいくらか明らかにできたと思う。異界をめぐつて、昔話と創作が語るファンタジー性は一色ではない。また、ジャンルを広げ、別の観点から探れば、異界のイメージはさらに多様化するだろう。今回はアプローチにすぎないが、昔話が語る世界を探ることだけを見ていても大きく前進できること、他のジャンルと学際的な情報交換がなければ、ますます成り立たない現在であることは確認できたと思う。

注一 「蛇女房・蛇淵型」『日本昔話通観／鳥取一〇』

注二 『子どもに語るアイルランドの昔話』所収「天国の歌声」／

渡辺洋子・茨木啓子編訳／こぐま社)

(なかむら・ともこ／昔話研究 土曜会)